

論文の内容の要旨

氏名：内 山 貴 夫

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：がん専門病院と医学部附属病院における周術期等口腔機能管理の現状とその比較

周術期等口腔機能管理は、医科疾患治療時の合併症予防を目的として、主に病院歯科で行われており、その対象疾患は、がん、心臓疾患、人工股関節置換手術などの整形外科領域疾患、臓器移植手術、造血幹細胞移植術の対象となる疾患などがある。がん患者に対する手術、化学療法、放射線治療、緩和治療の完遂には、合併して生じる有害事象のコントロールも重要であり、これには様々な口腔合併症も含まれる。また、がん患者以外においても、医科疾患治療時の口腔合併症の発症は、治療の成否に影響を及ぼす。がん治療では、口腔の衛生管理による入院期間の短縮、術後肺炎の減少および創部感染の減少が報告されている。また、近年、口腔の衛生管理のみならず、補綴治療や保存治療による口腔機能の改善を含む口腔機能管理が、がん患者への支持療法として適応されている。心臓血管手術、人工股関節置換手術、臓器移植手術、造血幹細胞移植術の患者においても、がん患者と同様に周術期に口腔の管理が行われている。

周術期における口腔の管理は、2012年度の診療報酬改訂において周術期口腔機能管理として保険収載され、2018年度の改訂では周術期等口腔機能管理となり、その適応範囲の拡大や内容の拡充がされている。様々な領域の外科手術や放射線治療、化学療法を行う際に歯科が介入し、術前から術後に至るまでの包括的な口腔機能管理を行うことで、周術期合併症を予防することを目的として病院歯科で運用され、その有効性を示す報告が散見される。しかしながら、周術期等口腔機能管理の内容の標準化やガイドラインの作成は行われておらず、病院の特性や対象患者が異なる病院施設間で、内容に差があると予測される。そこで、周術期等口腔機能管理の内容の標準化を検討するための基礎的な知見を得ることを目的として、がん治療中心のがん専門病院と多様な疾患に対して高度専門的な治療を行っている医学部附属病院における周術期等口腔機能管理の実施状況と歯科診療内容を調べ、特性が異なる施設間を比較、検討した。

本研究では、がん研究会有明病院歯科（がん研病院）と東京大学医学部附属病院口腔顎顔面外科・矯正歯科（東大医学部附属病院）において、2018年1月1日から2020年の12月31日までに周術期等口腔機能管理の対象となった患者（がん研病院：4,128人、男性51.7%、女性48.2%、東大医学部附属病院：1,433人、男性57.7%、女性42.2%）の診療記録から情報を得た。なお、周術期等口腔機能管理については、周術期等口腔機能管理計画策定料、周術期等口腔機能管理料（Ⅰ）、周術期等口腔機能管理料（Ⅱ）、周術期等口腔機能管理料（Ⅲ）、周術期等専門的口腔衛生処置（1）および周術期等専門的口腔衛生処置（2）の算定件数を調べた。また、周術期等口腔機能管理の対象患者に行われた歯科診療内容として、スケーリング、抜歯、マウスピース製作、暫間固定の4項目の件数を調査した。

3年間の周術期等口腔機能管理計画策定料の総件数は、がん研病院が4,128件、東大医学部附属病院が1,433件であった。周術期等口腔機能管理料（Ⅰ）、（Ⅱ）および（Ⅲ）の合計件数に占める各管理の割合は、両施設のいずれの年も周術期等口腔機能管理料（Ⅲ）が最も高かった。また、周術期等口腔機能管理料（Ⅱ）の割合は、周術期等口腔機能管理料（Ⅰ）よりも多かった。周術期等口腔機能管理料（Ⅲ）の割合が多い理由としては、化学療法や放射線治療の期間が長いこと、治療による有害事象として口腔粘膜炎が認められること、および手術に加えて化学療法や放射線治療を行う症例があることなどが考えられた。また、周術期等口腔機能管理料（Ⅱ）は、入院中の患者が対象であるため歯科受診の日程や時間調整がしやすく、入院前後の管理となる周術期等口腔機能管理料（Ⅰ）よりも実施に至りやすいことなどが、両病院に共通する状況として考えられた。周術期等専門的口腔衛生処置（1）と（2）は、両施設とも2019年に比べて2020年で件数が減少していた。COVID-19の流行が関係したことが推察されることから、感染症の流行が周術期における口腔の管理に及ぼす影響については、今後も注視していく必要があると考えられた。

歯科診療内容について、スケーリング、抜歯、マウスピース製作、暫間固定の総件数に占める各項

目の割合は、両施設ともスケーリングが最も高く、同じく術後感染症の予防を目的とする抜歯を合わせた割合は両施設とも8割を超えていた。周術期等口腔機能管理計画策定料1件当たりのスケーリングと抜歯の実施数は、どちらの処置もがん研病院が東大医学部附属病院を上回り、その差はスケーリングよりも抜歯が大きかった。スケーリングは、病院の特性や入院患者の属性の影響が少なく実施される、周術期における基本的な歯科診療であると考えられた。一方、抜歯は、歯の保存治療に要する時間が確保できないがん治療などで選択される頻度が高いことが示唆された。

周術期等口腔機能管理については、現在、当該施設での判断で管理が行われている。本研究では、がん専門病院と高度専門医療を幅広く提供する医学部附属病院では、周術期等口腔機能管理の実施と歯科診療の内容に、施設間で共通した状況とそれぞれの特徴が認められた。すなわち、周術期等口腔機能管理の内容の標準化の検討では、共通する事項とそれぞれの病院の特性によって生じる必要性の違いを考慮する必要があると考えられた。